

Willa Cather, The Professor's Houseにおける男たちの関係から見えるもの：フェミニズム批評の視点から

関口, 奈津恵

(出版者 / Publisher)

法政大学小金井論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

105

(終了ページ / End Page)

128

(発行年 / Year)

2011-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007747>

Willa Cather, *The Professor's House* における 男たちの関係から見えるもの

—フェミニズム批評の視点から

関 口 奈津恵

はじめに

アメリカの女性作家 Willa Cather (1873-1947) の *The Professor's House* (1925) は、*Alexander's Bridge* (1912) から *Sapphira and the Slave Girl* (1940) までの長編作品の中では中期の作品にあたり、開拓地でたくましく生きる女性を描いた *O Pioneers!* (1913) や *My Ántonia* (1918) などとは対照的に、ひとりの中年男性の危機的な状況を描いたものである。アメリカの開拓時代は過ぎ去り、第一次世界大戦後の新しいアメリカの物質主義、拝金主義に対する Cather のペシミスティックな世界観が色濃く表れたといわれる作品である。

「引っ越しは完了した」(“The moving was over and done.” 103)¹で始まる *The Professor's House* の主人公、Professor Godfrey St. Peter はヨーロッパ史を専門とする大学教授であり、ここミシガン湖畔の古い借家で結婚生活をスタートさせ、ふたりの娘を育てあげ、研究成果を8巻の書物にまとめた。研究業績は高く評価され、それで得た賞金で新居を建て、引っ越しを済ませたところである。使い勝手のよい新居には立派な書齋と美しい妻が待っているが、教授はなにかと理由をつけて湖畔の古い家の書齋に居続ける。イプセン (Ibsen 1828-1906) の『人形の家』(*A Doll's House* 1879) の Nora は人間らしく生きるために家を出たが、St. Peter 教授は『教授の家』を出られない。家族が去り、ほとんどの家具類もなくなった空っぽの家に彼が執着するのはなぜなのか。彼はその古い家で何を思い、その窓から何を見ているのか。何が彼の情熱を奪っているのだろうか。²

本論では、この作品をフェミニズム批評の視点から読み解きたい。1970年代にアメリカで始まったフェミニズム文学批評は、男性作家の創造した世界に男女関係の不平等さや女性嫌悪の潜むことを暴き、さらに、男性中心の批評では見落

とされてきた女性作家の再評価へと進んでいった。女性解放運動から派生したフェミニズム文学批評は、これまでの文学批評や研究に新たな視点を導入することで女性読者と女性作家を解放することを目指した。日本でフェミニズム批評が文芸ジャーナリズムに取り入れられたのは1980年代半ばであるという。1990年代入ると批評という形式そのものをからかうような『男流文学論』が出版され、賛否両論を巻き起こした。フェミニストという言葉が女にやさしい男性というくらしいの意味で使われていた当時、『男流文学論』³はそのフェミニストたちをも含む一部知識人たちの輦轡を買いつつ、「女流」という枠組みの政治性をあぶり出したのだった。

21世紀も10年が過ぎた現在、フェミニズム批評はどうなっているのだろうか。日本では、ジェンダーに関する文献を集めたアンソロジーのシリーズなどが出版され、とりあえずこれまでの活動をまとめる時期に入ったようだ。⁴ポスト・フェミニズムというタイトルを冠した書籍も見受けられるが、このポストという語は、終わったという意味ではなく、フェミニズムを何らかの形で経験したあとの現在という状況を指しているようだ。英米では、ジェンダーやセクシュアリティの研究が進むことで、もはや単純に「女として」読む、「女の」経験などとは言えなくなったが、それまでフェミニズムからは排除されがちであった同性愛者たちの視点も含まれるようになった。近年のCatherの研究も、そうした視点を取り入れることで息を吹き返している。フェミニズム批評は、研究者たちが自己批判や鍛練を続ける中で、静かに火をともし続けている。人種や植民地を問題視したあとでは、野蛮なインディアン像を無邪気には読めなくなるように、ポスト・フェミニズムの現在では、ジェンダーなどに関する意識はある程度社会に浸透し、私たちは、好むと好まざるとに拘わらず、それをまるきり無視することはもはや難しいのではないだろうか。

さて、そのような視点から *The Professor's House* を読むと、何が見えてくるだろうか。その前に、ジェンダーという概念を使わない読みの一例として、1957年のLeon Edelによる分析を取り上げてみたい。Edelはまず、E. K. Brownによる、「家」というシンボルを中心にした批評を取り上げる。教授にとって意味のある家と間違った家の対立があり、そして最後にたどりつくのが死の家＝棺であるという分析である。Edelは、文学批評としてこれは申し分のないものだが、教授の生きる意欲が失われていく理由が分からないと言い、次にフロイトの理論

を用いて自ら一気に分析してみせるも、専門用語を並べたてることに意味があるのかと自問し、最終的に Cather の伝記をもとにした解釈を提示する。Cather は長年の友であり、最大の理解者でもあった Isabelle McClung の邸宅に書斎を借り、そこで旺盛な創作活動を続けてきたが、McClung の結婚を機に状況が大きく変わる。新居の新しい書斎に移らないかとの彼女からの誘いを Cather は断ったという。Edel は McClung を母なる存在ととらえ、彼女が Cather のもとを去り結婚したことで、Cather には母なる存在に拒絶されたことによる不安感が生まれ、それが作品に反映されたものと結論付けている。⁵

その他、アメリカのフロンティア精神が物質主義に汚されていくことへの失望、時の持つ破壊性、契約社会への批判など、これまでにさまざまな読みがなされてきているが、ジェンダーという視点からこの作品を読み進めていく際にまず感じるのは、女性に対する嫌悪感 (misogyny)、そして男たちの関係の理想化である。作品に登場する女たちは、独身の裁縫婦 Augusta を除いてすべて妻であり、主人公は妻や娘たちから逃げたがっている。一方で、夢を持って語られるのが、Tom Outland を中心とする今は亡き男たちの生きざまや、彼らとの関係である。このように、男たちの間に結ばれた人間関係のみがロマンティックな関係として立ち現れる作品を、ジェンダーの視点から読むと何が見えてくるだろうか。作者の嫌悪感の感じられるような女性像をどうとらえたらいいのだろうか。

I 教授と Tom Outland

まずは作品全体の構成を簡単にまとめておきたい。*The Professor's House* は3部構成で、Book 1: Family は、新しい家への引っ越しを済ませた St. Peter 教授が古い家の書斎を出ようとしめない場面から始まり、一家の事情が明らかにされる。Book 2: Tom Outland's Story では、Tom Outland が教授の家に現れる以前の生活と冒険譚を1人称で語る。Tom は現時点ではすでに亡くなっているため、時系列的には Tom の語りを教授が回想している一遍である。最後の Book 3: The Professor で物語はふたたび現在の古い家に戻り、教授は自己の内面世界へと深く沈んでゆく。Book 1 は次のように始まる。

The moving was over and done. Professor St. Peter was alone in the disman-

tled house where he had lived ever since his marriage, where he had worked out his career and brought up his two daughters. (*The Professor's House* 103)

「引っ越しは完了した」というきっぱりとしたセンテンスに続き、これから展開する物語の前提が簡単に説明される。まず、タイトルにある「教授」の名前、教授は男性で、既婚者であり、この古い家で仕事を成し遂げ、二人の娘を育てあげたこと。

古い家は年中修理が必要な状態で、妻や娘たちには評判が悪かったが、手先の器用な教授は修理を楽しみ、フランス風の庭造りにも力を入れてきた。さらに、教授の身体的特徴の描写が続く。疲れを知らぬ水泳選手のような無駄のない体つき、カナダ系フランス人とアメリカ人の血を引きながら、専門であるスペイン史研究の影響か、その容貌はスペイン人のようだという。鋭い目つきと釣り上った眉のせいで学生からは秘かにメフィストフェレスと呼ばれている。15年間の研究を *Spanish Adventures in North America* の全8巻にまとめあげたところであるが、学生相手にもけっして手を抜かない。教授は学生たちの若さ、その旺盛な好奇心や批判力、情熱を愛しているのだ。よって、研究と大学の二重の生活 (“two lives”) は充実したものであった。しかし、順風満帆と思われる生活を送ってきた今、教授は情熱の減退を感じている。

St. Peter 教授という人物像について次のように批判するのは、1965年版 *The Professor's House* の “Introduction” を書いた J. B. Priestley である。⁶ :

Finally – and this is the gravest fault – I do not think [Cather] entirely succeeds with the professor himself. He is a brilliant sketch of a certain kind of man, but he seems to me to remain a sketch. He is a very clever woman's idea of what it might be like to be this kind of man; but it is still a woman's idea; there is a shortage of the denser masculine material in him. The professor has plenty of exterior maleness but is short of it inside, even for the kind of man he is supposed to be.

「内面的な男性らしさ」が何を指すのか具体的な説明はないが、その欠如が最大の欠点であるという Priestley の指摘は、裏を返せば、大学教授という地位を

得た男性にはなにか圧倒的な男性らしさというものがあるということを前提としているのだろう。見た目の男性らしさとは裏腹に、St. Peter教授に男性らしさが足りないと感じさせるものはなんであろうか。

一家の長である Godfrey St. Peter 教授は引っ越しを終えた今も古い家にとどまり、新居へしぶしぶ足を運ぶのは、妻と朝食をとる約束をさせられた週末や、娘たち夫婦との会食に限られる。長女 Rosamond は、戦争で亡くなった婚約者の Tom Outland から「アウトランド真空の原理」の特許権を託されていたが、今の夫の Louie がその商品化に成功し、莫大な資産を得た。しかし Tom が Rosamond にのみ特許権を託したことで、その後の人間関係にはひずみが生じている。姉妹の間には経済的な格差が生じ、かつて Tom に研究室を提供した同僚 Dr. Crane の妻は、教授に特許権の一部を要求してきた。St. Peter 教授は、彼らの間を取り持ちながら、Tom の情熱が商業化されたことや、金銭をめぐる人々のいざこざに幻滅している。

現実社会での煩雑さとは対照的に描かれ、重苦しいエピソードの間に差し挟まれるのが、かつての教え子、Tom Outland との思い出である。教授に大きなインスピレーションを与えることになる Tom が庭先に突然現れたのは、ある風の強い春の日であった。

The first thing the Professor noticed about the visitor was his manly, mature voice — low, calm, experienced, very different from the thin ring or the hoarse shouts of boyish voices about the campus. The next thing he observed was the strong line of contrast below the young man's sandy hair — the very fair forehead which had been protected by his hat, and the reddish brown of his face, which had evidently been exposed to a stronger sun than the spring sun of Hamilton. (164-165)

一見大学生ほどの年齢に見えるが、その声は意外にも男らしく落ち着いたもので、よく陽に焼けた顔は、Outland という名前に象徴されるように、よその土地からやってきたことを物語っている。季節外れの厚いコートに汗をかき、どこかいわくありげな様子のこの青年を教授は好ましく思い、Tom と St. Peter 家との家族ぐるみの付き合いが始まる。Tom の学歴は牧師からラテン語とスペイン語

を習った程度だったが、教授の指導を得て足りない学科もマスターし、念願であった大学への入学を果たす。教授はTomとの出会いによって若さと情熱を取り戻すとともに、TomがNew Mexico州の出身であることが、研究において自身に経験的に欠けていた部分を補うことを実感する。当時まだ幼かった娘たちは、少年時代のTomの冒険譚に夢中になるのだった。

Book 1におけるSt. Peter教授とTom Outlandの関係をどのように考えたらよいだろうか。Tomは教授の学問への情熱をふたたび掻き立て、夢と理想を共有できた相手であり、心行くまで語り合った仲であった。John N. Swiftは、法的な契約という点から教授の思考の特徴をとらえている。⁷ Tomの残した技術で資産を得た長女Rosamondが父に研究費を申し出ると、教授は、Outlandの金を使うつもりはないと、申し出をきっぱりと断る。研究で得た賞金で家を購入したことを怒っているのかと妻に問われ、研究の楽しさはその程度の金では買えないと言う。契約によって得られた財産を所有することに興味を示さない一方で、契約によらないものや関係を大切にし、例えば、一家に出入りする裁縫婦のAugustaが投資に失敗したと聞き、彼女を助けようと金策に奔走する。Tomと懇意にしたのも、彼の中に何かを成し遂げたいという強い熱意を見出したからである。妻のLillianはTomの中に理想を求めるドン・キホーテ的な性格を見、彼の大切にす騎士道精神は、ときに映画的（“chivalry of the cinema” 203）に映る。ふたりにあるこうした傾向から、教授とTomは法の下での契約関係なしに、理想を共有し、自己犠牲をもいとわぬ友愛で結ばれた関係と言えるだろう。

近年、教授とTomの関係を同性愛的なもの（homoerotic, homosexual）と解釈する研究者もいる。教授のTomに向ける視線に注目したい。初めて会った日の食事の後で、男らしい声と美しい額を持ったTomがトルコ石を差し出すとき、教授の視線がとらえるのは石そのものではなく、Tomの美しい手である。

“Hold them still a moment,” said the Professor, looking down, not at the turquoises, but at the hand that held them: the muscular, many-lined palm, the long, strong fingers with soft ends, the straight little finger, the flexible, beautifully shaped thumb that curved back from the rest of the hand as if it were its own master. What a hand! He could see it yet, with the blue stones lying in it. (170)

のちに妻 Lillian の美しい手の描写もあることから、手は、両性に共通する器官としてとらえられているという読み方がある。⁸ ふたりの手は愛着の対象として同じレベルにあるのだ。さらに教授は、Tom が若くして亡くなったことで、あの美しい手がつまらぬ雑用や女性の要求に応えるために使われずに済んだと想像している。⁹

Eve Kosofsky Sedgwick は『男同士の絆』¹⁰の中で、文学作品に見られる男たちの“homosocial”な関係を分析した。ホモソーシャルな関係とは、男性優位の社会システムを維持するために、「女性の交換」を特徴とし、これは男たちの間に“homosexual”な関係がないことを証明する手段でもあるという。よってホモソーシャルなシステムは、同性愛嫌悪と女性嫌悪をその基盤に持つ。これは教授と Tom との関係にはあてはまるのだろうか。もし Tom が戦死せずに教授の長女と結婚していたなら、ホモソーシャルな関係が成り立っていたのかもしれないが、この長女 Rosamond と Tom の馴れ初めについて、Cather はほとんど関心を払っていないようで、彼らが婚約していたことは唐突に示される。さらに、教授の妻の Lillian は夫の心をとらえた Tom に嫉妬を感じている。今や娘の婿たちを相手に浮足立つ Lillian であるが、なぜか Tom には終始良い印象を持たなかった。ホモソーシャルになりえた世界のあちこちがほころびを見せている状態である。

さて、教授たちの間に同性愛的な感情が見られるとして、それを Cather が描いたことにどのような意味を見出しうるのだろうか。Sedgwick はここにジェンダーとセクシュアリティの二重の屈折を見ている。¹¹ 女性である Cather が男性の立場から、男性の同性愛を描くという二重の屈折から見えてくるのは、Cather の生きた時代と文化において、レズビアン的な愛情と創造性が抑圧され、見えないものとされていたという状況であると言う。これは、Sharon O'Brien による伝記の出版以来とられるようになった、Cather がレズビアンであったという解釈をふまえたものである。¹²

作者の伝記的事実を考慮に入れない場合でも同じことが言えるのだろうか。本論ではとりあえず、描かれた人間関係に注目してみたい。ホモセクシュアルな関係はホモソーシャルな人間関係を基盤としたシステムにとっては脅威である。「女の所有と交換」を通じて維持している男性優位のジェンダー役割が壊れてしまうからだ。Tom の出現によって、妻というジェンダーをこなすことに喜びを感じている Lillian の存在理由が危うくなってしまった。さらに彼女は、夫が男

性としてのジェンダーを果たすことに興味を失いつつあることを感じとっているのかもしれない。Priestleyの批判する「男性らしさの欠如」とは、St. Peter教授の、男性教授としての権威に対する興味のなさ、一家の家長あるいは夫としての権威に対する興味のなさ、妻に対する所有欲のなさ、など、男性のジェンダーに必要なものを欠いていることが与える印象なのではないだろうか。Book 1ですでに感じられる、教授のこうしたジェンダー意識の欠如は、Book 3ではジェンダーに対する嫌悪感に変わっていくのである。

この章の最後に、この作品におけるTom Outlandの役割に触れておきたい。Tomはその“open manner”でSt. Peter一家にすっかり溶け込みながらも“frank”ではなく、どこかに影をひめている。Tomはアンビバレントな存在である。法による契約から自由であると同時に、特許をRosamondに集中させたことで、のちの人間関係に亀裂を生じさせた張本人である。つまり、法から自由な精神的世界を体現しながら、法律により保障された物質的・金銭的世界をもたらしている。教授に同性愛的な感情をもたらしながら、異性愛者の娘姉妹をも惹きつける。さらに、教授の周辺の人たちはすべて、実はこの社会的な位置づけの不安定なよそ者であるTomとの関係において語られている。¹³人間関係を一変させてしまう、この好悪の分かれる存在は、トリックスター的な存在といえるのかもしれないが、彼自身は自らの引き起こした結果を見ることなく、この世を去ってしまった。

II もう一つの家: TomとRodneyとHenry

Book 2: Tom Outland's Storyは、Tomが教授のもとにやってくるまでの話を1人称で語るという形をとっている。冒険と裏切り、別れの物語としてTom自身が心の奥に秘めてきた話ではあるが、教授はこれを“a story of youthful defeat, the sort of thing a boy is sensitive about — until he grows older.” (206)、若者によくある挫折の話という。狭い書齋を一步出れば息詰まるような人間関係に巻き込まれるBook 1の世界とは対照的に、Book 2でTomたちはニュー・メキシコ州の丘陵地帯を駆け巡る。

移動労働者の両親を幼いころに亡くしたTomは、O'Brien一家に育てられたが、生活は苦しく、まもなく鉄道機関士の連絡係（“call boy”）として働き始め

る。ポーカー・ハウスで見かけた機関助手の Rodney Blake が酔って帰るのを送り届けたことから、二人は意気投合し、一緒に暮らし始める。肺炎を患ったことを機に Tom は夜勤のある連絡係を辞め、2人はカウボーイの仕事を得る。10歳年上の Rodney は荒れた生活を改め、懸命に働きながら、Tom には仕事の合間に勉強をするようすすめる。そこにある日、元船員の老人 Henry が監督に連れられてくる。酒におぼれた老人は町では浮浪者同然の生活をしていたが、ここでは掃除や料理に生き生きと腕をふるう。

There with us, where he couldn't get at whisky, he was a model of good behaviour. "Drink is me weakness, you might say," he occasionally remarked apologetically. He shaved every morning and was as clean as a pin. We got to be downright fond of him, and the three of us made a happy family. (219)

ここにもう一つの家と家族のあり方が提示されている。Book 1の正統的な家族と比べると、この家族はかなりの変種である。性別も年齢も関係なく、各自が得意とする役割を選び、血縁関係はないが、互いを思いやりながら暮らしている。しかし、それは新たな可能性というよりは、すでに失われた美しい思い出として描かれている。この話を語る時点で Tom はすでに新しい生活を始めていたのだし、それを教授が回想している現在、Tom はこの世にいないのであるから。

さらにもう一つの家が登場する。逃げた牛を追った Tom が偶然峡谷の壁にインディアンの遺跡を発見し、彼ら家族はその発掘に夢中になる。岩壁に掘られた住居群はその中に残された道具類を含め、丁寧に作られたものばかりで、そこに高度な文明が存在していたことをうかがわせるが、数体の遺骨を除いて人間の痕跡が見当たらない。“Cliff City”の住民たちは、どこかに出たところを部族ごと殺されたのではないかというのが、インディアン文化に親しい Duchene 神父の見解である。住居の暮らしぶりから、彼らは生活を“design”するという感覚を持ち、平和に暮らす技術を発達させたのだろうと想像する。

平和な文明を育んだこの部族において、唯一暴力の痕跡を示すものがある。Tom たちが“Mother Eve”と呼ぶところの女性ミイラの存在である。黒い髪と白い歯が若さを思わせるこのミイラは、折れたあばら骨が突出し、叫んでいるかの

ような表情は苦痛に満ちている。神父はこれを、個人的な事情によるものであろうと推測する。妻の不貞を知った夫が彼女を撲殺したのだらうと。平和を希求する高度な文明をもった部族の中に、妻の不貞が原因の殺人という、ありきたりな、しかし激しい悪意と暴力の要素が差し挟まれている。異性のカップルが不幸であるのは、Catherの他の作品にも見られる傾向であるが、Cliff Cityが理想的な社会として描かれているだけに、その残酷さが際立つ。フェミニズム批評の初期にKate Millettが個人的な男女間の権力関係をも「政治」と定義づけたように¹⁴、平和な部族の中でも、男女という最小単位では不平等で暴力的な政治が行われていた可能性をCatherはあえて描いている。

1925年の出版当時の書評¹⁵によると、1つの小説の中に別の中編を差し挟むような構成の評判はよくなかったようだが、Cather自身は音楽のソナタ形式を小説に応用したと言っている。また、“Tom Outland’s Story”は*The Professor’s House*の出版に先立つ1915年、Catherがコロラド州にある先史時代の遺跡、Mesa Verdeを旅した経験から着想を得ており、カウボーイによる先住民の遺跡の発見という実話をもとにしている。¹⁶

もし、ソナタ形式が異なる2つの主題をぶつけることを意味しているのであれば、どのような主題が含まれているのだろうか。Cather自身は、第1の主題がSt. Peterで、第2の主題がTom Outlandであると言っているが¹⁷、これについては例えば、拝金主義と理想主義、現代文明と古代文明などさまざまな解釈がなされており、ジェンダーの面からも、2つの主題を読み取ることができる。St. Peter一家に見られるような、性別がジェンダー役割にそのまま結びついている形と、すなわち異性愛システムの中で慣習的なジェンダー役割が割り振られている形と、教授とTomのように異性愛のシステムからはずれた人間関係である。Book 2ではその2つの主題が大きく変形した形で表現され、血縁関係のない男たちが、生活上の役割が性別に規定されていない状態で、「家族」のような生活を営む。さらに異性愛システムにおけるジェンダーのテーマは、入れ子状態にはめ込まれた遺跡のエピソードにも反映されている。

Sedgwickは*The Professor’s House*の世界を、教授の家という場に象徴される垂直方向の“heterosexual domesticity”（居間、キッチン、書斎、妻と夫などに代表される異性愛的な家庭性）と、水平方向に広がる男性同士のロマンスが交差する空間的イメージで読み解く。¹⁸ この交差するイメージを借りるなら、ジェン

ダー化された権力関係の世界に (Book 1), ジェンダーの境界が揺らいだ平面的な世界 (Book 2) が交差しているとも言えるだろう。狭い書斎の唯一の窓からミシガン湖の雄大な眺めが広がるように, Tomたちのつかの間の夢であったBlue Mesaでの生活は, 教授の記憶の中でどこまでも広がっていくのである。この部分をTomに語らせることにより, 読者は教授となってTomに語りかけられ, Lillianのいない夜の秘かな楽しみを共有することになる。Book 2は次のように締めくくられる。

In the spring, just a year after I quarreled with Roddy, I landed here and walked into your garden, and the rest you know. (254)

Ⅲ 女たち

ここまで見てきたように, *The Professor's House* においては男たちの関係が前面に描かれるため, 女たちの存在感が薄い。初期のフェミニズム文学批評では女性作家の作品に描かれた「女の経験」を掘り起こすことで, これまで見落とされてきた価値を見出そうという動きがあった。¹⁹ これは主に男性作家の作品に見られるような, 家父長制の維持を促すような男女間の権力イメージを糾弾する方法とともに, 女性読者にとっては開放感のある作業であったが, *The Professor's House* にその方法を使っても, 期待するような成果は得られないだろう。理想の追求や精神的な充足を求める夫に対し, 妻Lillianやその娘たちは, 世俗的な欲求を満たすことが最大の関心事であるかのように描かれているからである。

Lillianが力を注ぐのは, 新居を使い勝手と見栄えの良い「教授の家」にすること, 高価なものを手に入れられる環境を維持すること, 娘婿たちとのやりとりを楽しむことであり, それぞれ家庭を持った娘たちも, 母に習った生き方を選んだようである。彼女たちは家父長制に虐げられてはいないし, よってそれを問題視することもない。一方で, 世俗的な物事から次第に離れていく教授の存在があり, テキストには女性に対する嫌悪感が漂う。1925年当時の書評の中で, 今でいうところのジェンダーの問題に触れているものがある。

Professor St. Peter's wife, being an eminent[ly] practical person — like hun-

dreds of other American women – ignores all these subtle danger signals. Like hundreds of other American women, she treats her husband very much as she treats her children. (Mann 247)

さらに、Catherは同性に厳しい女性像を描いたという指摘もあるが²⁰、そのような印象はまぬがれず、初期のフェミニズム批評を使ってLillianたちを掘り起こしてみても、たいした収穫は得られそうにない。男性作家が家父長制の維持を前提としてものを書いている一方で、女性作家なら現状を突破するような女性像を提供してくれているはず、というナイーブな読みは、新しい読み方を世に問うという意味では十分にインパクトがあったが、それは同時にこの方法の限界をも示していた。その後、男女の社会的役割に注目するジェンダー理論が取り入れられることで、女性性だけでなく、男性性が作られていく過程をも分析できるようになった。ここでは、女たちがその人生をどう生きているか、というよりも、教授の目を通して見えてくる彼女たちを考察してみたい。妻の代表としてLillian、そして独身の裁縫婦Augustaを取り上げる。

Lillianと教授は学生時代に留学先のパリで出会い、恋に落ち、結婚した。彼女は人や芸術に対して直感的に激しく反応する女性で、彼女の意見はときに偏見ともいえるものでもあったが、教授はそのような反応を面白がっていた。みすぼらしい生活には我慢がならず、娘たちとともに華やかに暮らしてきたが、それを可能にしているのは彼女が実家からの仕送りを得ていることに加えて、出会った人や機会からつねに最大の成果を得たいという彼女の貪欲さ、“worldliness”のためであり、教授も、娘婿のLouieも彼女の意欲的な生き方に敬意を払う。Lillianは、妻というジェンダー役割の中で、自らの財産や性格など、持てるものを最大限に生かした生活を送っている。講義のために赴いたシカゴで、ふたりはパリでの留学時代を思い出しながらオペラを鑑賞する。

Through the next act he often glanced at her. Curious, how a young mood could return and soften a face. More than once he saw a starry moisture shine in her eyes. If she only knew how much more lovely she was when she wasn't doing her duty! (152)

教授の妻という役割を果たすことにおいて前向きな Lillian であるが、普段夫の目には“duty”に強張った顔と映っているのだろうか。そしてその強張った顔が教授にとっては重荷になりつつあるのかもしれない。彼女が妻というジェンダーを維持するには、教授も夫としてのジェンダー役割をこなさなくてはならない。氣力を失いつつある夫とのバランスが徐々に崩れているのだ。

もうひとりの女性、Augusta は教授一家とは血縁関係のない使用人の一人であるが、作品の冒頭と終盤で重要な役割を果たす。彼女は髪が白くなりつつある中年の独身女性で、娘たちの小さなころから一家の服を縫ってきた。古い教授の家では、3階の書斎が彼女の裁縫室との共有スペースになっており、教授が大学にいた間そこは彼女の裁縫部屋となる。収納箱には教授の論文と裁縫の型紙が混在しているような気楽さで、教授は彼女に気を許している。Ian F.A. Bell はこの書斎の様子に男女のジェンダーが融合する可能性を見出している。²¹

しかし、Augusta にとっての裁縫は単に女性的ジェンダーを意味するものなのだろうか。彼女の裁縫は Lillian にとっての妻という役割とは少し違う意味を持つように思われる。選択しうる職業の幅に社会的な制約があるとしても、Augusta は生計を立てる手段として裁縫の仕事を選んだのであって、それは女という性に自動的に課される役割ではない。よって、Blue Mesa の家で家事に腕をふるった Henry 老人のように、仕事の遂行に異性愛システムを必要としない。Augusta の裁縫が教授に脅威を与えないのは、男女のジェンダーの融合というよりも、それが、男女のジェンダーの緊張関係を生じさせないところにあるからではないだろうか。

教授の目を通してみると、彼は Lillian その人に対する嫌悪というよりも、彼女のいる場所に威圧感を覚えているように思われる。Lillian の内面が描かれることはほとんどないため、その好き嫌いの激しさがどこから来ているのか、彼女にとって妻であることは何を意味しているのか、などを詳しく知ることはできない。しかし、唯一、彼女の内面をうかがえるのが、Tom への嫉妬の理由である。

結婚して間もなく教授が大学の職を得たとき、同僚たちはみな年長で、学業の面でも、社会的経験という点からも、同じ立場の者がおらず、“mental companionship”として頼りにできたのは妻の Lillian だけであったという。その後親しくなった共同研究者や友人たちも、Tom に対するほどの嫉妬を掻き立てることはなかった。ということは、彼女が夫との関係に望んだのは、物質的なものや社

会的対面ばかりでなく、人として対等関係にある精神的なつながりだったのである。Lillianの嫉妬は一見したところ、妻の座を揺るがされたことに起因しているようだが、“mental companionship”にジェンダーは関係ないとすれば、彼女自身にもジェンダーの境界を揺るがす可能性があったのかもしれない。

教授はその点に無自覚ではないはずだが、Lillianは次第に妻や責任といった象徴的な存在となり、教授を追い詰めていく。一方のAugustaはBook 3で重要な役割を果たすことになる。

IV ふたつの“romance”と再生の可能性

分量的にはBook 2の半分にも満たないBook 3: The Professorに登場するのはほぼ教授1人である。妻と娘夫婦がフランスで休暇を楽しむ間、教授は古い家の書斎でTomの遺跡発掘の手記を編集している。私たちはTomの手記そのものを見ることはできないが、語り手によれば、的確な表現を使った簡潔なその手記は、その無駄のなさゆえに、語り手のあふれだしそうな喜びを感じさせるといふ。ところが教授は、1週間もあれば終わると考えていた編集作業に気付けば2か月も費やしている。これまで日々を常に精力的に送ってきた彼が、夢うつつの状態にあるからだ。この、“twilight,” “half-awake”な状態の中で、彼は頭の中にあるものを次々に図式化しながら、終末へと一気に進んでいく。Book 1, 2で提示された2つのテーマである、異性愛的枠組みの中でのジェンダーと、その役割が性に規定されない人間関係は、Book 3において、なんらかの融合または解決を見せるのだろうか。教授の思考過程を整理しながら辿ってみたい。

まずは偶然性の問題について。教授は人生を偶然の連続と考えている。幸せな結婚生活も、情熱を呼び覚ましたTomとの出会いも、偶然に与えられたものであるが、こうした幸運を与えられたことに感謝してさえいる。

All the most important things in his life, St. Peter sometimes reflected, had been determined by chance. His education in France had been an accident. His married life had been happy largely through a circumstance with which neither he nor his wife had anything to do. (255)

偶然に与えられた幸福はしかし、それを味わう情熱が減退した今、自分という存在につながりとしておくことができない。教授の意識は自らの人生からさえも離れていくようだ。

His career, his wife, his family, were not his life at all, but a chain of events which had happened to him. All these things had nothing to do with the person he was in the beginning. (259)

次に、2種類のロマンスについて。Tomは教授にとって、「想像のロマンス」(“romance of imagination”)であり、Tom亡きあとにその穴を埋めるものが見つからないようだ。

He had had two romances: one of the heart, which had filled his life for many years, and a second of the mind — of the imagination. (255)

さらに教授は、偶然によって与えられた出来事や、「心のロマンス」(“romance of the heart”)を引き受けてきたのは、思春期以降に形成される「社会的な人/男」(“social man”)としてのGodfrey St. Peterであったと思に至る。「社会的な人/男」はまた愛する(“to love”)人でもあり、そのような存在としてのGodfrey St. Peterは、Lillianとの出会いで人生のピークに達した。その後の生活は“penalty”と“responsibility”によって形作られながら、流れるように進んでいったという。

Because there was Lillian, there must be marriage and a salary. Because there was marriage, there were children. Because there were children, and fervour in the blood and brain, books were born as well as daughters. (259)

それでは、「社会的な人/男」になる前の“original”で“primitive”な存在とは何であるのか。少年のころを思い返せば、彼は自然との境界もあいまいな未開な状態にありながら物事の真理を理解し、その根源にいるという感覚をもっていた。思春期に達すると、根源的な自己に、性(“sex”)によって形が変えられた新し

い自己が接ぎ木されるというのが教授の考えである。²² 性が社会的人間を決定づけ、その後のあり方は意思とはあまり関係なく展開していくという考え方は、性別によってジェンダーが決定されていくというフェミニズムの考え方に通じる。彼にとって問題なのは、家族や学問などへの情熱がすべて性によって決定づけられた社会的人間に起因するもので、社会的人間であることに興味を失った今、かつて注いだ情熱がほとんど消えてしまっているということである。

教授の体の中にあらゆるものと未分化だった少年期の Godfrey が戻ってくる。しかしそれは、自由な幸福感というよりは、すべての社会的関係に関心を失った状態である。「愛」というものが、思春期以降の「社会的な人/男」としての情熱を指すのであれば、教授は今、愛から疎外された (“fall out of love”) 状態にある。「愛」は「家庭内で社会的な関係」と言い換えられ、さらにそれが「家族の中の自分の居場所」となっていく。

Falling out, for him, seemed to mean falling out of all domestic and social relations, out of his place in the human family, indeed. (266)

突き詰めれば、教授は異性愛システムのもとでのジェンダー化された社会的役割に嫌気がさしているだけではないのか。そこにとらわれずに、「想像のロマンス」や生きる情熱を取り戻す方法と可能性はないのだろうか。

あらゆる社会的関係に実感のもてなくなった教授のもとに、妻や娘夫婦たちから帰国の知らせが届く。バカンスを早めに切り上げたのは、娘の Rosamond が懐妊したためであるが、彼はこのめでたい知らせにも気付かないかのように、今は会えないと、うろたえるばかりである。そして暴風の吹き荒れるその夜、事故が起きる。書斎のガスストーブの火が消え、唯一の換気口である窓も閉まり、このまま窓を開けなければ、などと考える間もなく教授は気を失ってしまう。倒れた彼を発見し、手早い処置で助けたのは鍵を取りに来た裁縫婦 Augusta であった。

意識を取り戻した教授は彼女を見て久しぶりに寂しさという感覚を思い出し、彼女がこれまでもつねに「修正的、救済的」な (“corrective,” “remedial”) な力を発揮してきたことに気付く。そして、彼女の送ってきたような花のない生活 (“the bloomless side of life” 270) を送るのも悪くないという思いに至る。事実を事実として受け入れる彼女の生き方を、喜びもなければ深い悲しみもないもの

ととらえ、いわば諦念からそうした世界に身を置くことを決意したようである。しかし、事故を機に少なくとも死への誘惑は消え、妻や娘たちを乗せた *Berengaria* 号を迎える気力を取り戻したところで作品は終わっている。

At least, he felt the ground under his feet. He thought he knew where he was, and that he could face with fortitude the *Berengaria* and the future.
(271)

かつて *Augusta* は、髪が白くなるまでお仕えするとは思わなかった言い、それを聞いた教授は驚いた。彼女にこれ以外の生活を思い描けたことが信じられなかった、と考える教授は、*Augusta* の個人的な生活には思いが至らない。*Augusta* が裁縫婦という仕事を主体的に選び取ったのかどうかは、階級あるいは社会的な格差の問題を抜きにして断定することはできないが、少なくとも彼女は、自らの人生について迷いのないように見える。そのような彼女の生き方とは、異性愛システムを必要とせず、自らに必要なことと、社会に必要とされている (“needed”) ことを、テキパキとこなしていくというものである。

敬虔なカトリックでもある彼女が教授を心身ともに救うというメタファーを、宗教を軽んじてきた教授の改宗と見る読み方もあるが、むしろ、宗教を介さぬ悟り、と読むのが Skaggs である。*Augusta* の名から連想する *Augustan age* は、ローマ史の中でも平和、実際的な社会改良、文学などを特徴とする時代であったし、実在する *Berengaria* 号の名の元になったのは、*Berengar of Tours* であるという。ベレンガリウスはパンと葡萄酒の聖変化を否定して、象徴説を唱えたため、異端として排斥された人物である。²³ いずれにしても、*Augusta* 自身の性質である、実際性、現実性を強調するような名前である。宗教に関しては自由な発言をしてきた教授が、宗教に救いを求める葛藤なども描かれていないので、本論ではこの結末を、*Augusta* の実際的な強さに救われた *Godfrey St. Peter* 教授が、“*God-free*” なまま、現実に向き合う力を取り戻しつつあるととらえておきたい。

1920年代のアメリカでは女性が選挙権を獲得し、いわゆる第1波フェミニズムが完了するが、それは女性に権利を与える一方で、新たな抑圧の枠組みを作ることとなる。女性が選挙権を得るには、女性たちの政治への参加が社会全体にとって意義あることをアピールしなければならず、女性の解放を訴えるよりは、

良き妻、良き母として社会を健全にする能力があることを訴える方向へと戦法を変えて参政権運動は成功した。おりしも禁酒法の時代が始まり、その運動を使命として後押しした女性団体も多かったという。この時代、風俗的には自由なフラッパーなどの若い女性が登場する一方で、政治的な力をもった女たちは異性愛システムにもとづく正統なジェンダーを強化していき、そうした枠組みにおさまらない同性愛者たちは異端として位置づけられることとなる。

St. Peter教授が、禁酒法の時代にシェリー酒を楽しみ、独身生活に戻ったような気楽さで自らの食事を用意する描写からは、1920年代に強化されつつあった社会体制やジェンダーへの抵抗感が感じられる。*The Professor's House*における女性たちの印象の薄さは、Catherあるいは教授の女性嫌悪というよりは、女性的ジェンダーにたいする嫌悪、それに追従する女たちへの疑念を表しているのではないだろうか。妻が女性的ジェンダーをまっとうしようとするれば、男性も男性的ジェンダーに従わなければならない。男性優位の社会でそのように生きるとは、男性にとってけっして不利ではないはずだが、St. Peter教授の感覚では耐えがたいことなのである。さらに、女性的ジェンダーに疑いをもたない者たちは、異性愛システムに適応した者たちでもある。St. Peter教授がTomに同性愛的感情を抱いていたとすれば、二重に生きづらいはずであった。

教授に残された道は、「社会的人間」でありながら、「想像のロマンス」を取り戻す道を探ることである。Lillianを抑圧的なシステムの象徴としてではなく、一人の人間として認識し、新たな関係を築くことはできるのだろうか。新しい教授の家が、ジェンダーの境界にとらわれず、“domesticity”と“imagination”の縦横無尽に交じり合う、新たな想像と創造の場所となる可能性は、皆無ではないのである。さらに、教授が仕方なく選ぶと宣言したAugusta的世界がはたして彼の考えるような、花のない、喜びのないものであるかは実際のところ分からないのだ。Catherは、異性愛システムとそれに基づくジェンダーに違和感を覚える人物像を生みだし、生命の危機から救い、将来に向き合う強さを与えた。出版当時それは批評家たちに違和感を与え、低い評価に彼女は落胆することになるのだが、その後も彼女は書き続けた。その世界は現代の私たちにもさまざまな問いを投げかけ続けているのである。

使用テキスト

Willa Cather: Later Novels. The Library of America, 1990.

註

- ¹ 以下作品からの引用は *Willa Cather: Later Novels*. The Library of America, 1990.による。引用末尾の括弧内にページ数を記す。
- ² “[His eyes] had lost none of their fire, though just now the man behind them was feeling a diminution of ardour.” (104)
- ³ 『男流文学論』(1992)は上野千鶴子、小倉千加子、富岡多恵子の3氏が座談会形式で吉行淳之介や谷崎潤一郎などの作品について忌憚なく語ったもの。歯に衣着せぬ作品批評で大変話題になったが、同じ年には論文のアンソロジー『女が読む日本近代文学—フェミニズム批評の試み』も出版されている。その後1990年代にはフェミニズム批評の本が続々と出版された。フェミニズム前の日本の文芸批評の状況および『男流文学論』に対する当時の反応は、『新編日本のフェミニズム11 フェミニズム文学批評』に詳しい。
- ⁴ これまでの多岐にわたるフェミニズム研究の成果をまとめたシリーズとして、『新編 日本のフェミニズム』(全12巻)や『ジェンダー史叢書』(全8巻)などが出版されている。
- ⁵ Edelは、それでもなお、伝記的にでも解釈しなければ主人公の失望の意味が理解できないのは、*The Professor's House*の小説としての失敗であると評している。なお、現在伝記的事実に注目した場合、Isabelleは母なる存在というよりも、同性愛的な愛情の対象として理解されることが多い。
- ⁶ ちなみに、Priestleyによれば、Tom Outlandは少年像としてはまずまずの出来であり、それは、ある種の少女たちに“tomboy”(おてんば娘)という言葉が使われるように、Catherの中に内なる少年がいるからだろうと言う。Catherの中に「内なる男性大学教授」がいるという可能性は当時としては考えられなかったのだろうか。
- ⁷ John N. Swiftは、Cather後期の作品が社会的なリアリティーをとらえていないという批判に対する反論として、当時のアメリカ社会で急速に重要性を増しつつあった契約や所有という概念に対するCatherの強い嫌悪感が作品中に表れていることを論じている。

- ⁸ ‘“Nice hands” (36), the professor comments to Lillian: the hand in Cather is not necessarily attached to a body of either gender; the professor’s responsiveness to Tom and to Lillian focuses on an organ they both share.’ (Goldberg 134)
- ⁹ ‘A hand like that, had he lived, must have been put to other uses. It would have had to “manage” a great deal of money, to be the instrument of a woman who would grow always more exacting. He had escaped all that.’ (257)
- ¹⁰ 『「ホモソーシャル」 という用語は、時折歴史学や社会科学の領域で使われ、同性間の社会的絆を表す。またこの用語は、明らかに「ホモセクシュアル」との類似を、しかし「ホモセクシュアル」との区別をも意図して造られた新語である。』 (Sedgwick 『男同士の絆』 1-2)
- ¹¹ “What become visible in this double refraction are the shadows of the brutal suppressions by which a lesbian love did not in Willa Cather’s time and culture freely become visible as itself.” (Sedgwick “Across Gender, across Sexuality” 36)
- ¹² ただし、Cather自身は自らのセクシュアリティについてなにも公言していない。
- ¹³ Goldbergを参照。
- ¹⁴ Millettは著書 *Sexual Politics* における「政治」を次のように定義している。「この論文では、政治というものの定義を、会議や議長や党派といった、相対的にせまく排他的な世界とはとらえていない。『政治』という用語は権力構造的諸関係、すなわち一群の人間が他の一群の人間に支配される仕組みをさすものとする。」 (Millett 『性の政治学』 69)
- ¹⁵ 1925年の版当時の書評については、*Willa Cather: The Contemporary Reviews* を参考にした。作品の構成に関して次のような批判がある。“Nor am I able to grasp the reason why Miss Cather deliberately stops the narrative and devotes part two to the telling of Tom Outland’s story.” (Gibbs 234), “*The Professor’s House* not only lacks narrative (apart from an irrelevant story inserted in the book), ...” (“Miss Cather’s Professor” 245),
- ¹⁶ 伝記的事実に関してはO’Brienの *Willa Cather: The Emerging Voice* などを参

- 照のこと。ソナタ形式を意識したこと、および遺跡の発見者から聞いた話を元に行っていることについては Cather の “On *The Professor's House*” を参照。
“But the experiment which interested me was something a little more vague, and was very much akin to the arrangement followed in sonatas in which the academic sonata form was handled somewhat freely.” (“On *The Professor's House*.” 974)
- ¹⁷ Fanny Butcher は 1925 年の書評に次のような Cather 自身の言葉を引用している。“This story is built like a piece of music, the theme of St. Peter, then the theme of Tom Outland, and the last part of the book the mingling of the two themes.” (Butcher 237)
- ¹⁸ “... in this text the crossing of the upstairs/downstairs vertical axis of heterosexual domesticity by the space-clearing dash of a male-male romance may somehow refract and decompress the conditions of a lesbian love and creativity.” (Sedgwick “Across Gender” 36)
- ¹⁹ 例えば Elaine Showalter はこのような読み方を “gynocritics” と命名し、これまでの男性中心の批評とは違う、女性 (“gyno-”) 独自の基準で批評を行うことを提唱した。
- ²⁰ “Professor St. Peter, with his vigorous masculine color and enthusiasm, is deftly centered within a revolving system of feminine selfishness. In this book Miss Cather is very hard on her own sex.” (Ashley 254)
- ²¹ Ian F.A. Bell を参照。
- ²² “The Professor knew, of course, that adolescence grafted a new creature into the original one, and that the complexion of a man’s life was largely determined by how well or ill his original self and his nature as modified by sex rubbed on together.” (261)
- ²³ Merrill Maguire Skaggs, *After the World Broke in Two*. (83)

引用文献

- Anders, John P. *Willa Cather's Sexual Aesthetics and the Male Homosexual Literary Tradition*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1999. Print.
- Ashley, Schuyler. “Willa Cather’s Professor Is a Living Character.” *Kansas City*

- Star* 3 October 1925. Rpt. in *Willa Cather: The Contemporary Reviews*. Cambridge: Cambridge University Press, 2001, 2009. 254. Print.
- Bell, Ian F.A. "Re-Writing America: Origin and Gender in Willa Cather's *The Professor's House*" 1994. Rpt. in *Willa Cather: Critical Assessments*. Vol. III. East Sussex: Helm Information, 2003. 484-515. Print.
- Butcher, Fanny. "Willa Cather Tells Purpose of New Novel." *Chicago Tribune* 12 September 1925. Rpt. in *Willa Cather: The Contemporary Reviews*. 237-238. Print.
- Cather, Willa. *The Professor's House*. 1925. 1961. London: Hamish Hamilton, 1965. Print.
- . *The Professor's House*. 1925. *Willa Cather: Later Novels*. New York: The Library of America, 1990. 103-271. Print.
- . "On *The Professor's House*" *The News Letter of the College English Association*, October 1940. Rpt. in *Willa Cather: Stories, Poems, and Other Writings*. New York: The Library of America, 1992. 974-975. Print.
- Edel, Leon. *Literary Biography*. 1957. Rpt. in *Willa Cather: Critical Assessments*. Vol. III. East Sussex: Helm Information, 2003. 443-456. Print.
- Gibbs, A. Hamilton. "Contamination of Rewards: Willa Cather's Portrait of a Professor to Whom Success Was Extinction." *New York Evening Post, The Literary Review* 5 September 1925. Rpt. in *Willa Cather: The Contemporary Reviews*. 233-235. Print.
- Goldberg, Jonathan. *Willa Cather and Others*. Durham: Duke University Press, 2001. 129. Print.
- Lindemann, Marilee. *Willa Cather: Queering America*. New York: Columbia University Press, 1999. Print.
- Mann, Dorothea L. "Willa Cather's Professor." *Boston Evening Transcript* 16 September 1925. Rpt. in *Willa Cather: The Contemporary Reviews*. 246-248. Print.
- Millett, Kate. *Sexual Politics*. 1970. Trans. 藤枝滯子他 『性の政治学』 ドメス出版, 1985. Print.
- "Miss Cather's Professor." *Springfield Sunday Republican* 13 September 1925.

- Rpt. in *Willa Cather: The Contemporary Reviews*. 245–246. Print.
- O'Brien, Sharon. *Willa Cather: The Emerging Voice*. Cambridge: Harvard University Press, 1987, 1997. Print.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. "Across Gender, across Sexuality: Willa Cather and Others." *South Atlantic Quarterly* 88.1 Winter 1989 53–72. Rpt. in *Short Study Criticism: Criticism of the Works of Short Fiction Writers*. Detroit: Gale, Cengage Learning, 2009. 30–37. Print.
- . *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. 1985. Trans. 上原早苗, 亀澤美由紀『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会, 2001. Print.
- Skaggs, Merrill Maguire. *After the World Broke in Two: The Later Novels of Willa Cather*. Charlottesville: The University Press of Virginia, 1990. Print.
- Showalter, Elaine. "Toward a Feminist Poetics" 1979. Rpt. in *The New Feminist Criticism: Essays on Women, Literature, and Theory*. New York: Pantheon Books, 1985. 125-143 Print.
- Swift, John N. "Fiction of Possession in *The Professor's House*." *The Cambridge Companion to Willa Cather*. Cambridge: Cambridge University Press, 2005. 175-190. Print.
- Willa Cather: The Contemporary Reviews*. Cambridge: Cambridge University Press, 2001, 2009. Print.
- 上野千鶴子, 小倉千加子, 富岡多恵子『男流文学論』筑摩書房, 1992. Print.
- 江種満子, 関礼子他『女が読む日本近代文学—フェミニズム批評の試み』新曜社, 1992. Print.
- 『ジェンダー史叢書 全8巻』明石書店, 2010. Print.
- 『新編 日本のフェミニズム 11 フェミニズム文学批評』岩波書店, 2009. Print.